

御遷座三百七十年記念誌



鎮守社

須賀神社記念事業実行委員会

忍者 伊賀者と赤絆天

天正十年五月徳川家康公が織田信長の命を受け、泉州堺へ手勢僅か引き連れて行っていたその翌六月に本能寺の変が起り、その事変に遭遇し、明智光秀の勢い一時盛んであったので、甲州より連れて行つた、宍山梅雪なども討ち死した程であつた。

本道より三河の国に帰る事の危険を感じて伊賀の山越えをした際、その道案内をしたのが野武士の様な伊賀者約二百人程が伊勢の白子迄警護をしたと云う、白子からは船で熱田に渡り無事岡崎に辿りついた由である。

翌七月に家康は京都へ進発の時鳴海まで行くと、伊賀者が出迎えてお供を願ひ出たので主従の縁となり、伊賀者の頭服部半蔵を始め伊賀一族は身辺警護の任に当たることとなつた。それ以来大阪最後の戦夏の陣迄実に三十四年間忠実に家康に仕え前後十二度の戦功により、天正十九年五月に家康が四つ屋の原に於いて鷹狩りの時、伊賀者約三百人に千石を賜つた由。

其の拝領地は渋谷の原宿の隠田、赤坂一ツ木村その他で年に七俵五升づつ貰っていた様である、その中の一ツ木が紀州候の藩地に入つた爲に、紀州家より借地礼として三年目毎に金一朱を送られる事となり、これを紀州地代と称えた由である。かくして伊賀者は北伊賀町加賀屋さんの辺りに役所があつて、そこで給配を受けていたとの事である。

家康公は江戸城を築いて、西口の固めに門内に服部半蔵の邸宅を賜つて居住した処から半蔵門の名称がついたと云われている、又伊賀者は半蔵門の外側の左右に住まわせた。

服部半蔵は岡崎三郎信康（家康の長子）の介錯をした事から信康の菩提を弔う爲に、その後仏門に入り法名を西念と改めたが、慶長元年五十五歳で此の世を去つた、始め麹町の安養院に葬つたのを後で四谷に改葬し、法名をその儘西念寺（若葉一丁目）と号したのである、此の西念寺には伊賀者の檀徒となれる者が多かつた由である。

服部半蔵の跡を嗣いだのが仲と云い、仲町に屋敷があつたので仲殿町と云つた所以である、その後四谷見附の守り役を仰せつかり寛永十二年より始まつた外堀工事の時に、伊賀者は四谷大通りを挟んで左右に移り住まい、南北伊賀町が出来たのである。この時全部移つたか否かは明らかではないが、或る説に依れば家康公はその軍功を賞し、各一人に禄高千石を与えんとしたのを、仲が過分なりと辞した由を伝え聞き仲を笹寺（現四谷四丁目）門前迄追いかけて殺そうとしたとかで、その関係者が罰せられた由、その関係が寛保年間の町方書上書は百二十八人に減少している。

服部半蔵は三州岡崎の出身で豪力無双の武士で鎗半蔵として名高く、二人でも持つ事の出来ない長身の鎗を戦場で縦横無尽に薙ぎ払いつつ疾駆したと云われている。その時の半蔵の鎗は西念寺に伝わっている。然し大東亜戦争の際惜しくも戦災に会い折れてしまつたが形はその儘残っている。

昔は伊賀絆天と云う赤筋が入つた絆天が良く用いられた様であるが、その謂われは、当時の伊賀同心の多くは本丸大奥の御錠番を勤めていたので、家康のお部屋に「みか様」と云われる方が居られ、その方の特に恩顧を蒙り、冬の寒い時等は自ら火鉢を抱えて来られて、老人の詰め所に置いて行かれたと云う美談もあり、「みか様」が召しておられた木綿羽織に赤筋が入っていたのに準らえたという云い伝えがある。

現在、例大祭の折りに若葉一丁目町会において赤絆天を着用して、神輿に供奉するようになったと云われている。

